

# William Caxton の作品に見る orthography

溝 端 清 一

## 1. はじめに

活版印刷術をイギリスに初めて導入した人物として名高い William Caxton は、単なる印刷業者としての役割だけに留まっただけではない。ノルマン人の支配下にあった中世期において、英語という言葉がイギリス人の言語として認知、発展を遂げていく中、Caxton は、その印刷、出版を通して、重要な文学的遺産を後世に伝えただけか、標準英語形成の大きな役割の一端をも担っていたと言える。彼は 100 種類を超える作品を印刷、出版したが、フランス語、ラテン語、オランダ語の作品を自ら英語に翻訳して出版することさえした。その数も 20 種類以上に及ぶ。

Caxton の誕生の時期と場所については特定されていないが、自身はケント生まれとしており、1422 年頃だったと考えられる。若年の頃ロンドンの毛織物商人 Robert Large の徒弟として働き、その後ブルージュへ移り住んだ。当時そこはヨーロッパにおける交易の最も重要な拠点の一つであり、イギリス人の毛織物貿易商の主な組織である毛織物輸出商組合の本部がそこに置かれていた。彼は、ブルージュやゲントを中心に低地地方西部において商業活動を続け、商人としての地位を高めていく。1462 年までにはイングリッシュ・ネーションとして知られるブルージュのイギリス商人居留地団長にまでなっていた。所属する階級で高い地位に就いた Caxton は、イングランド及びブルゴーニュ公国の最高位にある人々と接触することとなり、多くの点で後の外交官と同じ役割を果たしていた。理由は明白ではないが、1471 年の夏、彼はフランドルを突然去って一年半の間ケルンで亡命生活を送る。その間当時の新しい技術である印刷術を習得してブルージュに戻り、ケルンで築いた人脈を利用して印刷所を開設する。そこで彼は英語とフランス語の書物を数点出版した後、30 年ぶりにイギリスに帰国してウェストミンスター寺院の構内に印刷所を設立して本格的に印刷業に乗り出すのである。Caxton の印刷本の中には、今は忘れ去られたが、その当時は流行した多くの書物や彼自身の翻訳作品が含まれている。中でも彼が

印刷して以来今日までずっと需要のある Geoffrey Chaucer の *Canterbury Tales* や Thomas Malory の *Le Morte Darthur* がある。<sup>(1)</sup>

Malory が集大成したアーサー王物語は、あらゆる言語で書かれたアーサー王伝説の中でも最も優れた作品の一つであり、彼とほぼ同時代の Caxton が 1485 年に *Le Morte Darthur* というタイトルで出版したことによって、その版を唯一の参照テキストとして中世においてだけばかりか、その後も連綿と再版、愛読され続けることになる。しかし、Malory の作品は英文学史上において長らく学問的な批評にさらされることがほとんどなかったのであるが、1934 年に Caxton 版とほぼ同時代のものと推定される Malory の作品の写本が W.F.Oakeshott によって発見されたことにより Malory の作品研究が急激な進展を遂げることになる。この写本は、イギリスのウィンチェスター・コレッジのフェロー用図書館に収蔵されていたことから通称ウィンチェスター写本と呼ばれている。それに基づいた校訂版を E.Vinaver が 1947 年に刊行して、ウィンチェスター写本の優位性を主張したことが、イギリスを始め、日本やアメリカにおいても活発な議論を引き起こす契機となった。Vinaver は、次の 5 つの論点を提示した。<sup>(2)</sup>

### (1) 統一性の問題

ウィンチェスター写本は、全体が 8 つの物語に分類されていて、それぞれに物語が完結したことを示す跋文が存在する。この写本の構成を根拠に、Malory は Caxton 版のタイトル *Le Morte Darthur* が示すような一つの統一された作品を書いたのではなく、8 編のそれぞれ独立したロマンスを書いた。一方、Caxton は印刷する際写本に存在したはずの跋文を最後のものを除いて削除し、物語全体を 21 巻に分類して、それぞれの巻を章分けして出版した。

これに対して、R.M.Lumiansky や C.Moorman らは原典作品との比較や、あちらこちらに前後照応のつながりの章句が見られる事実から、Malory は最初から統一ある一つの作品を意図していたとして、Vinaver の複数ロマンス説を否定した。<sup>(3)</sup> Vinaver が 1967 年の第 2 版でも自説を強調した後、議論そのものは下火となっている。

## (2) 作者の特定の問題

ウィンチェスター写本の第1篇「アーサー王」と第4篇「サー・ガレス」の跋文で、Maloryは自らを囚われの騎士と呼び、牢獄からの解放を願っている。この記述は、投獄された経験を持つウォーリックシャーのニューボールド・レヴェル出身のMaloryが作者であることを示唆している。この説はVinaver以前から他の学者によって提案されていたが、ウィンチェスター写本の跋文の中で、Maloryが囚われの騎士であったことが判明したことによって一層補強されることになった。

## (3) 製作順序の問題

ウィンチェスター写本を構成する8編は、Caxton版と同一順序で配列されているが、これは製作年代順ではない。Maloryは先ず頭韻詩*Morte Arthure*を散文訳にしてから第1話のフランス語の作品の英語翻訳に取り掛かった。このVinaverの見解の他、ウィンチェスター写本やCaxton版の順序で書かれたとする見解や、それらとはまったく異なる順序で書かれたとする見解もある。

## (4) 系統図の問題

ウィンチェスター写本は、Maloryの自筆原稿でも、Caxtonが印刷時に用いた植字原稿でもない。従って、写本とCaxton版の間には直接的な親子関係はなく、現存せぬMaloryの自筆原稿から転写されたものと想定したXに対してウィンチェスター写本とCaxton版は従兄弟関係にある。この主張に対してL.Hellingaは疑問を呈した。<sup>(4)</sup> ウィンチェスター写本のいくつかの箇所にはCaxtonが使用した活字の裏写りが見られたり、Caxtonが用いた印刷インクが付着していることを発見したのである。このことから、ウィンチェスター写本がCaxtonの印刷工房にあったことが明らかになった。写本には組み頁見積り等の記号が記されていないことから、Caxtonが直接印刷用に使用したのではないが、何らかの形で利用したことは否定できない。

## (5) Caxton版改訂者の問題

Caxton版の第5巻（ウィンチェスター写本の第2話）のローマ遠征の部分は、

写本に見られる頭韻句を多用した古風な散文を、15世紀末の読者の便宜を考えた Caxton が大幅に書き換えたものである。Caxton 版第5巻の改訂者の問題解決には、日本の研究者の果たした役割が極めて大きかった。Vinaver の Caxton が書き直したとする説への挑戦として、1975年に開催された国際アーサー王学会で、その直前に亡くなった W. Matthews の ‘Who revised the Roman War Episode in Malory’s *Morte Darthur*?’ が代読され、ウィンチェスター写本の第2話を Caxton 版第5巻のように短縮したのは Caxton ではなく Malory 自身であったとする Vinaver 説を否定するものであった。アメリカの Malory 研究者たちは、Matthews 説を擁護する見解を提出したが、イギリスや日本の研究者の反論によって Caxton がローマ遠征の挿話を改訂したことが決定的となっている。<sup>(5)</sup>

上記のごとく、ウィンチェスター写本の発見とそれに基づいた Vinaver の校訂版が世に問われて以来、Malory 研究は目覚ましい発展を遂げたことになる。しかし、その結果、より明らかになったことは、ウィンチェスター写本の優位性ではなく、Malory 研究者の最終目標と言える Malory の自筆原稿に最も近いテキストの実現に Caxton 版は欠かすことの出来ないものであるということである。今後の Malory 研究の進展のためには、両者を相補的なものとして位置づけ、ウィンチェスター写本と Caxton 版それぞれについてのより詳細な言語学的、書誌学的研究が必要である。

Caxton 版は、2部現存する。一つは、マンチェスター大学の John Rylands 図書館所蔵の Rylands copy と呼ばれるものであり、あと一つは、ニューヨークの Pierpont Morgan 図書館所蔵の Morgan copy である。筆者は、以前両版の言語学的、書誌学的観点からの比較を行った。<sup>(6)</sup> その結果得られた知見から生じる疑問は、Caxton はどの程度まで彼の印刷工房での作業に関わっていたのか、また、Caxton 自身の筆記上の特徴はどのようなものだったのかということである。これらの解明が Caxton が出版した作品への彼自身の関与の在り様を解き明かす重要な手掛かりとなると考えられる。

本稿では、先ず Rylands copy と Morgan copy の比較によって得られた両者の違いをまとめる。そして、筆者がそれらの考察によって得た結論の妥当性を裏付けるため、更に行った調査の結果を述べる。

## 2. Rylands copy と Morgan copy の相違<sup>(7)</sup>

### 2.1 作品全体の比較

Thomas Malory のアーサー王物語の Caxton 版は、Rylands copy 及び Morgan copy の2部だけ現存する。これら2つの copy は、一部を除き 1 gathering が 4 sheets の 55 gatherings からなる 2つ折り判である。その折記号の構成は、 $\pi$ - $2\pi^8$ 、 $3\pi^2$ 、 $a-i^8$ 、 $k-u^8$ 、 $x-z^8$ 、 $\&^8$ 、 $A-I^8$ 、 $K-T^8$ 、 $V^8$ 、 $X-Z^8$ 、 $aa-dd^8$ 、 $ee^6$  である。Morgan copy は 432 葉の完本であるが、Rylands copy の方は、最初の blank leaf は残しているものの本文を 11 葉 (11、r7、r8、N2、N7、T4、T5、ee3、ee4、ee5、ee6) 欠いており、欠葉部分は 19 世紀に artist の J.Harris によってペン・ファクシミリで補われたものである。この2部の copy には、同じ組版でありながら異なった paper stock を用いて印刷している sheet もあることが P.Needham によって明らかにされている。<sup>(8)</sup>これらの copy を一語一語互いに校合すると、両者には明確に異なる箇所が存在する。折記号が “N” の gathering と “Y” の gathering の場合、それぞれの 3 番目の sheet の外側と内側には、一から組み直したとしか考えられないほどの違いが見られるのである。それらの sheet を除いたテキスト全体に見られる相違点をまとめると次のようになる。

- (a) 折記号と章付けの脱落及び誤り
- (b) 単語、文字、virgule の脱落
- (c) 印刷用紙の傷
- (d) 植字ミス
- (e) 活字の消失
- (f) 印字むら

上記の分類の観点から Rylands copy と Morgan copy を比較した場合、両者のどちらか一方がより十分に校訂された状態であるとは言い切れず、どちらの copy にも校訂される必要のある箇所が存在すると言える。

折記号が “N” の gathering と “Y” の gathering の 3 番目の sheet の外側と内側について比較すると、2つの copy の間で非常に異なるので、その相違について次の 2.2 で述べる。

## 2.2 Rylands copy と Morgan copy の特定の sheet 間の比較

### 2.2.1 植字ミスと punctuation

“N” と “Y” の gathering の 3 番目の sheet の外側と内側についての折記号は次のようである。“N” の gathering は、4 sheets からなっている。2つ折り判であるので、3番目の sheet の外側の折記号は N6v、N3r となり、内側は N3v、N6r となる。同じく、“Y” の gathering も 4 sheets からなるので、3番目の sheet の外側の折記号は、Y6v、Y3r となり、内側は Y3v、Y6r となる。それぞれの copy におけるこれらの sheet の植字上のミスについて言えば、Morgan copy の方が植字ミスが多い。punctuation については、Caxton 版の 2 つの copy のどちらの場合も punctuation は主に virgule ( / ) で示され、時々 period が使われることがある。Rylands copy の上記の特定の sheet には、Morgan copy に比べ、必要のない箇所に punctuation を付けていると考えられる箇所が幾つかある。しかし、Morgan copy には付けられていないが、punctuation を付けてある方が良いと判断できる箇所が Rylands copy には多く見られた。

## 2.2.2 orthography

### 2.2.2.1

Rylands copy と Morgan copy の特定の sheet について比較すると、それぞれの sheet に共通して出現する単語の中で spelling の特徴の違いを示す例がいくつかある。それらの例と出現率を百分率で表すと次のようになる。

(1) all	Rylands	Morgan	(2) king	Rylands	Morgan
al	16.1%	54.9%	kyng	25.0%	95.0%
all	6.5%	16.1%	kynge	75.0%	5.0%
alle	77.4%	29.0%			

(3) said			(4) shall		
	Rylands	Morgan		Rylands	Morgan
said	69.5%	21.3%	shal	21.7%	91.4%
sayd	30.5%	78.7%	shall	13.1%	4.3%
			shalle	65.2%	4.3%

(5) sir			(6) so		
	Rylands	Morgan		Rylands	Morgan
sir	53.9%	3.8%	so	24.2%	69.7%
sire	8.9%	0%	soo	75.8%	30.3%
syr	29.5%	96.2%			
syre	7.7%	0%			

(7) will			(8) with		
	Rylands	Morgan		Rylands	Morgan
wille	62.5%	0%	with	100%	31.4%
wyl	0%	62.5%	wyth	0%	68.6%
wyll	12.5%	0%			
wylle	25.0%	37.5%			

(9) you		
	Rylands	Morgan
you	10.5%	100%
yow	89.5%	0%

上記 (1) ～ (9) のそれぞれの単語の異なる spelling の比率から分かることは、Rylands copy の sheet の場合、“alle”、“kynge”、“shalle”、“wille” の頻度が高いことから、語尾に -e を伴う spelling を好む傾向が Morgan copy の場合より非常に強く見られる。Morgan copy の場合は、“sayd”、“syr”、“wyth” の頻度の高さから分

かるように、-i- より -y- を用いた spelling を好む傾向が Rylands copy より強く出ている。また、Morgan copy の場合、“soo” より “so”、“yow” より “you” といった現代英語と同じ spelling を好む傾向も示している。

### 2.2.2.2

Morgan copy の特定の sheet の場合、Morgan copy の作品全体から見て一般的とは言えない特徴のある spelling の単語が出現する。各 sheet の折記号ごとに Rylands copy と対比させた場合の Rylands copy 側の spelling と併記して以下に示す。[ ] 内の数字は、Morgan copy 全体の中でのそれぞれの出現数を表す。

	Rylands	Morgan
折記号 N6v	(1) there with [191]	therwyth [6]
折記号 N3r	(2) Laūcelot [107]	Lancelot [7]
	(3) felaushyp [53]	felowshyp [3]
	(4) hand [331]	honde [2]
	(5) merueillous [31]	meruayllous [14]
	(6) felawes [98]	felowes [16]
折記号 N3v	(7) merueylles [3]	meruaylles [5]
	(8) done [398]	doon [15]
	(9) only [25]	onely [2]
折記号 Y6v	(10) honderd [106]	hondred [23]
	(11) with alle [154]	wythal [2]
	(12) ben [535]	been [6]



## 折記号 Y3v

(13) byseche [16]	beseche [3]
(14) wryten [19]	wryton [8]
(15) laide [1]	layed [15]
(16) dyed [61]	deyed [7]

## 折記号 Y6r

(17) blood [206]	blode [2]
------------------	-----------

上記の Rylands copy に出現するとして挙げた例のうち、Rylands copy でも “laide” は2例しか出現しない。それら以外の Rylands copy の例は、Rylands copy 並びに Morgan copy ともそれぞれの作品全体に渡って出現する。ところが、Morgan copy 側に出現するとして挙げた例は、特定の折丁でしか出現しないのである。つまり、“N” と “Y” の折丁の3番目の sheet 以外では、 $\pi$ 、 $2\pi$ 、 $3\pi$ 、dd、ee の折丁でしか出現しない。 $\pi$ 、 $2\pi$ 、 $3\pi$  は、Caxton が自ら書き加えた preface と rubric が印刷された折丁であり、dd と ee は Caxton 版のアーサー王物語の最後から1つ目と2つ目の折丁なのである。中世の時代に写字生が書物を転写する時、写字生の筆記習慣が反映された。活版印刷の黎明期においても、写本転写の場合と同様、植字工自身の筆記習慣が反映されていたと考えられる。このことを前提にして考えると、“N” と “Y” の折丁の3番目の sheet の両面と  $\pi$ 、 $2\pi$ 、 $3\pi$ 、dd、ee の折丁を植字したのは、同一の人物であると推測できる。この推測を更に裏付けるため、2.2.1 で挙げた (1) ～ (9) の単語の spelling の variant の比率を、 $\pi$ 、 $2\pi$ 、 $3\pi$ 、dd、ee の折丁でも調べた。そうすると、Morgan copy の特定の sheet の調査で得た (1) ～ (9) のそれぞれの単語の variant の比率と多くの場合ほぼ同じ比率で  $\pi$ 、 $2\pi$ 、 $3\pi$ 、dd、ee の折丁でも出現するという結果を得た。

## 2.2.3 統語構造や文脈の校訂

“N” と “Y” の折丁の3番目の sheet に関して、punctuation や spelling といった外的な特徴から見た Rylands copy と Morgan copy 間の相違とは別に、作品内容に関わる統語構造や文脈の校訂があるかを調査した。Rylands copy には Morgan

copy より優れた校訂がなされていると考えられる箇所はなかったが、Morgan copy には Rylands copy よりも優れた校訂がなされていると考えられる箇所が数箇所ある。

	Rylands	Morgan
(1) N3r l.10	and at	and assaye at
(2) N3r l.23	there moo	there no moo
(3) N3v l.32	this he	this is he
(4) N6r l.19	this	his
(5) Y3r l.1	wete yow wel	wete ye wel
(6) Y3r l.19	good and gentyl	good gentyl

上記 (1)~(6) のうち、(1)、(3)、(4) については表現の明確さという点で Morgan copy の方が優れた校訂を示していると言える。(2) については、Rylands 側は文脈上意味をなさず、文脈の統一という観点から Morgan copy の方が正しい読みを示している。(5) の 2 人称代名詞の選択は、この箇所の文脈では、Morgan copy の方が適切である。(6) については、語調並びに慣用法の面から Morgan copy の校訂の方がよいと判断できる。以上 (1)~(6) の Morgan copy 側の校訂内容から、このような校訂は、作品内容によく精通しており、英語という言語への高い見識を有する人間にこそできるものと判断できる。

Rylands copy と Morgan copy の特定の sheet、つまり折記号 N6v、N3r、N3v、N6r、Y6v、Y3r、Y3v、Y6r の比較調査とその結果得られた orthography の特徴が他の 5 つの折丁 ( $\pi$ 、 $2\pi$ 、 $3\pi$ 、dd、ee) にも共通して見られることから、Morgan copy のこれらの箇所は、同一の植字工によって植字されたことは明白である。Morgan copy の特定の sheet は、Rylands copy の場合と比べ punctuation が緻密でなく植字ミスが多いのは、印刷作業が進行する過程で、Morgan copy の特定の sheet (計 2 枚) に修正を加えるため急いで活字を組み直したためであろう。<sup>(9)</sup>そして、その人物は、2.2.3 での考察から、作品の表現や内容の妥当性にまで立ち入って校訂できる英語への高い見識を備え、校訂原稿の編集ばかりか植字も同時に行ったと考えるのが自然である。では、このような人物を Caxton 工房で想定する

とすれば誰なのか。この人物を特定するため、Caxton が翻訳、出版した作品の中で、第1版だけでなく第2版まで出版した3種類の作品の調査を行った。

### 3. 3つの翻訳作品の第1版と第2版<sup>10)</sup>

Caxton は、フランス語、ラテン語、オランダ語の作品を英語に翻訳して出版した。その数も20種類以上に上るが、第2版まで出版したのは、*Game of Chess* (第1版1474年、第2版1485年)、*Mirror of the World* (第1版1481年、第2版1489年頃)、*Reynard the Fox* (第1版1481年、第2版1489年頃) の3種類だけである。これら3種類の作品の第1版と第2版を typography、orthography、vocabulary 及び syntax の面から比較調査を行なったところ、次のような結果を得た。<sup>11)</sup>

#### (1) typography

*Game of Chess* の場合、第2版には、第1版に見出される植字を誤った箇所は修正され、植字の誤りがほとんどない。一方、*Mirror of the World* と *Reynard the Fox* の場合、第1版に比べ、第2版には植字上の誤りが多く、慎重さを欠く、ぞんざいな植字態度が見える。

#### (2) orthography

*Game of Chess* の場合、第1版と第2版とでは spelling の variant に違いが見られる。例えば、第1版にある “to fore”、“an other” は “tofore”、“another” に換えられ、“than”、“all(e)way”、“made”、“peple”、“only”などは、多くの場合、第2版では “thenne”、“alwey”、“maad”、“people”、“onely” に換えられている。一方、*Reynard the Fox* の場合、orthography の面での目立った違いがないが、*Mirror of the World* の場合は、全体的に第1版では “i” が好まれ、第2版では “y” が好まれる傾向がある。例えば、第1版に見られる “thing”、“wise”、“without”、“will”、“said”、“with”、“wit”、“like”などは、第2版では、多くの場合、“thyng”、“wyse”、“wythout”、“wyll”、“sayd”、“wyth”、“wyt”、“lyke” と綴られている。

## (3) vocabulary

*Game of Chess*、*Mirror of the World* 及び *Reynard the Fox* の3作品とも第1版で用いられた語を第2版では別の語に言い換えている場合がある。*Game of Chess* の場合、第1版の “fornier”、“compaignon”、“oughwer” を第2版では “baker”、“companyoun”、“ony where” に変換されている。*Mirror of the World* の場合、第1版の “maynee”、“maynye” を第2版では “seruaūte”、“seruaūtes” に換えられ、*Reynard the Fox* の場合、第1版の “dasse”、“hāmes”、“rore”、“cryde”、“lerynge”、“yl” を第2版では “brocke”、“buttockes”、“styre”、“sayde”、“lernynge”、“euyl” に換えられている。

第1版の語を第2版で他の語に変換した3作品に共通の理由として、作品の内容理解を容易にするため読者に馴染みのある語に換えようとする配慮が考えられる。

## (4) syntax

3作品のうち、特に *Game of Chess* の場合、第1版において非文法的な構文や文脈的に意味をなさない箇所を、第2版においては文脈的に統一の取れたものに校訂した例が目立つ。

- i) why chacest and smyttest away thyse flyes (1st ed.)  
why chasest & smyttest thou away thyse flyes (2nd ed.; underline mine)
- ii) Ther is none that is so synfull as he that hath alle the world in despyte  
For he is in pees that dredeth no man And he is ryche that coueyteth no thyng  
(1st ed.; underline mine)  
There is none that is so blisful as he that hath al the world in despite For  
he is in pees that dredith no man & he is riche that coueiteth no thyng  
(2nd ed.; underline mine)
- iii) And foure thinges The first is wher ye shal vnderstande that ye ought to  
consydere here in fore that lxiiii poyntes ben sette in the eschequer (1 ed.;  
underline mine)

And ye shal vnderstonde that ye ought to considere here in four thynges  
The first is wher fore that lxiiii poyntes been sette in the eschequer (2 ed.;  
 underline mine)

上記の例の i) の場合、第1版において主語が欠如した文に、第2版では主語“thou”を付け加えることによって意味の捉え易い文法的な構文に変えている。ii) の場合、第1版において“synfull”を挿入することによって文脈が壊れ意味をなさない文となってしまうが、第2版において“blisful”と置き換えることによって統一の取れた文脈となっている。iii) の場合、第1版において、“four things The first is wher”を不適切な箇所に誤って挿入したため構文的に意味をなさない文脈となってしまうが、第2版において適切な位置に置き換えられている。i) ～ iii) の例から推測できることは、単なる機械的な植字作業しかできない植字工なら、syntax や文脈統一の観点から問題のある構文に気付くこともなく、ましてや文法的で文脈統一の取れた構文に校訂することなどできないということである。従って、i) ～ iii) の例が示すような校訂作業をするには、英語への高い見識があり、植字する作品内容によく精通しているばかりか、どのような顧客向けの作品なのかということをよく認識している人物でなければならない。

上記の3作品の第1版と第2版の(1)typography、(2)orthography、(3)vocabulary、(4)syntaxの観点からの比較調査によって見えてくるのは、校訂態度の違いである。Caxtonが翻訳、出版した20を超える作品の中で、第2版まで出版したのは*Game of Chess*、*Mirror of the World*、*Reynard the Fox*の3種類だけである。これから明らかに分かることは、これらの作品は非常に需要の多い作品であったということである。しかし、どのような顧客に対して需要が多かったのかという点では、作品によって異なると言えよう。*Mirror of the World*と*Reynard the Fox*の場合、Caxtonの時代の新興の読者層とも言える中産階級に人気のあった作品である。*Reynard the Fox*などはヨーロッパでは幾つかの言語で古くから読まれていた寓話である。*Mirror of the World*は百科事典として人気があり、Caxtonの第1版はロンドンの織物商で議員でもあったHugh Bryceの依頼で出版したものである。<sup>12)</sup> *Game of Chess*の場合は、Caxtonが商人として成功を収め、イングランド

の宮廷に出入りすることによって得られた顧客とも言える宮廷貴族層向けの書物である。*Game of Chess* の第1版と第2版の Caxton が加えた序文には、目の肥えた貴族たちに購買意欲をそそらせる凝った配慮を読み取ることができる。<sup>13)</sup>このような作品による購買層の違いというものが第2版の校訂態度に表れたとしても不思議ではない。*Game of Chess* の第2版には植字ミスがほとんど無いのに対して、*Mirror of the World* や *Reynard the Fox* には植字ミスが多い。理解を容易にするための vocabulary の変換が、*Mirror of the World* や *Reynard the Fox* の第2版に見られるものの、統語構造や文脈内容面での校訂らしい校訂が無い。一方、*Game of Chess* の第2版には、(4) syntax で述べたように他の作品の第2版には見られない校訂がいくつか見られる。これは、宮廷貴族層という書物に対する要求の多い顧客を見据えての校訂と理解できる。活版印刷術を十分身に付け、宮廷貴族層の書物についての好みをよく理解して、高い英語の見識を持って *Game of Chess* の第2版のような校訂を加えることのできる人物。そういった意味で、上記2. の Morgan copy の特定の sheet を植字した人物と極めて近似していると言える。次の4.1において、両者は同一の人物であるかどうかを検証する。

#### 4. *Game of Chess* の第1・2版と Morgan copy の特定の sheet

もし、Morgan copy の折記号“N”と“Y”の折丁の3番目の sheet と *Game of Chess* の第2版を植字した人物が同一の人物であれば、2.2.2.1 と 2.2.2.2 で挙げた Morgan copy の orthography の特徴が *Game of Chess* の第2版にも表れるはずである。*Game of Chess* の第1版と第2版のテキスト全体に渡って2.2.2.1の(1)~(9)の語の variant を調査した。その結果を4.1において述べる。

##### 4.1

2.2.2.1 で挙げられている(1)~(9)の語について、*Game of Chess* の第1版(1474年版)、第2版(1483年版)及びMorgan copyの“N”と“Y”の折丁の3番目の sheet における variant を調査した結果を百分率で示す。*Game of Chess* の第1版の総語数は43,912語、第2版は43,404語である。Morgan copy の特定の2枚の sheet の総語数は、3,258語である。但し、(5) sir については、1474年版では4例、1483年版では3

例しか出現しないので、調査対象から外した。

(1) all

	1474 年版	1483 年版	Morgan
al	0%	59.9%	54.9%
all	23.9%	5.4%	16.1%
alle	76.1%	34.7%	29.0%

(2) king

	1474 年版	1483 年版	Morgan
kyng	2.1%	93.3%	95.0%
kynge	97.9%	6.7%	5.0%

(3) said

	1474 年版	1483 年版	Morgan
said	18.6%	16.9%	21.3%
saide	2.9%	0%	0%
sayd	65.1%	80.9%	78.7%
sayde	13.4%	2.2%	0%

(4) shall

	1474 年版	1483 年版	Morgan
shal	6.1%	97.0%	91.4%
shall	93.9%	0%	4.3%
shalle	0%	3.0%	4.3%

(6) so	1474 年版	1483 年版	Morgan
so	97.9%	100%	69.7%
soo	2.1%	0%	30.3%

(7) will	1474 年版	1483 年版	Morgan
wil	2.1%	1.9%	0%
will	14.6%	0%	0%
wille	2.1%	1.9%	0%
wyl	0%	48.1%	62.5%
wyll	50.0%	3.9%	0%
wylle	31.2%	44.2%	37.5%

(8) with	1474 年版	1483 年版	Morgan
with	37.7%	43.5%	31.4%
wyth	62.3%	56.5%	68.6%

(9) you	1474 年版	1483 年版	Morgan
you	0%	92.3%	100%
yow	100%	7.7%	0%

上記のそれぞれの語の variant の比率の比較から先ず言えることは、*Game of Chess* の第1版と第2版は、互いの variant の比率の異なりから、第1版と第2版は異なる植字工によって植字されたことを示唆している。一方、*Game of Chess* の第2版と Morgan copy の特定の sheet の variant の出現比率は、(6) so の場合は別としても、調査対象としたテキストの内容や総語数が大きく異なっているにもかかわらず非常



に近似している。これは、*Game of Chess* の第2版と Morgan copy の特定の sheet を植字した人物は同一の人物であることを証明するものである。

Morgan copy の特定の sheet には、2.2.2.2 で挙げたような特徴的な spelling の語が出現する。それらと同じ語形の語が *Game of Chess* の第2版においても見出されるかを調査した。その結果を 4.2 で示す。

#### 4.2

2.2.2.2 で挙げた Morgan copy の特定の sheet を植字した人物に特徴的な spelling の語が、*Game of Chess* の第2版にも見出されるかどうかを確認するために行った調査結果は以下の通りである。それぞれの語の variant はすべて列挙した。( ) 内の数字は、*Game of Chess* 第2版のテキスト全体で出現する頻度数を表す。まったく同じ語形のものが出現した場合は下線を引き、当該の語と同じ複数形ではなく、単数形で出現した場合は波線を引いた。

- (1) therwyth  
    therwyth (2)
- (2) Lancelot  
    出現せず。
- (3) felawshyp  
    felawshyp (3)
- (4) honde  
    hand (13)、hande (3)、hond (8)、honde (7)
- (5) meruayllous  
    meruailous (1)、meruayllous (3)
- (6) felowes  
    felawe (2)、felawes (1)、felowe (4)
- (7) meruaylles  
    meruaile (1)、meruayle (3)、meruaylle (2)、merueyle (1)、merueylle (1)
- (8) doon  
    don (10)、doon (30)

- (9) onely  
 only (3)、onely (23)、oonly (2)
- (10) hondred  
hondred (7)
- (11) wythal  
 出現せず。
- (12) been  
 ben (194)、been (33)
- (13) beseche  
beseche (1)
- (14) wryton  
 wreton (8)、wryten (2)
- (15) layed  
 出現せず。
- (16) deyed  
deyed (2)、dyed (4)
- (17) blode  
 blood (13)

上記の結果から、(1) ~ (17) の中で、出現しなかった (2)、(11)、(15) と (14)、(17) の場合を除いて、他のすべてが *Game of Chess* の第2版においても出現したことが分かる。この結果は、4.1 で述べた *Game of Chess* の第2版と Morgan copy の特定の sheet を植字した人物は同一であるとの判断の妥当性を更に補強するものである。それに加え、この人物は校訂原稿の編集をして植字も行ったとする考えを一層裏付けるものである。

## 5. まとめ

イギリスにおける活版印刷の黎明期にあたる15世紀後半に、printer及びpublisherとして活躍したWilliam Caxtonは、自分自身が英語に翻訳したものを含めて100種類を超える作品を印刷、出版して印刷術そのものばかりか中世期の貴重な文学的遺産を後世に残し、英語という言葉の標準化にも大きな役割を果たした。しかし、彼が作品を印刷、出版する上でどのような役割を演じていたのか、彼のorthographyの特徴はどのようなものだったのかといったことについてはまだまだ未解明のままである。

筆者は、先ずCaxton版*Le Morte Darthur*の現存する2つのcopyであるRylands copyとMorgan copyとの間で著しく異なる箇所があることに着目して、両者を校合してその相違を明らかにした。その結果、Morgan copyの特定のsheet、つまり折記号N6v、N3r、N3v、N6r、Y6v、Y3r、Y3v、Y6rは、Rylands copyとは別の一人の植字工によって校訂、植字されたこと、また、他の5つの折丁(π、2π、3π、dd、ee)もその同じ植字工によって植字されたことが明白となった。しかも、その人物は、作品の表現や内容の妥当性にまで立ち入って校訂できる英語への高い見識を備えた人物であることが推測できた。

上記のことを更に確証するため、Caxton自身の文体、語法、綴り字の特徴がよく反映していると考えられる20を超える英語に翻訳した作品の中で、Caxtonが第1版だけではなく第2版まで出版した3つの作品(*Game of Chess*、*Mirror of the World*、*Reynard the Fox*)の第1版と第2版を校合して言語的調査を行った。その結果、Morgan copyの特定のsheetを植字した人物と*Game of Chess*の第2版を植字した人物は、校訂原稿の編集と植字まで行える同一の人物であることが確認できた。つまり、活版印刷術を十分身に付け、要求の多い宮廷貴族層の書物の好みをよく理解して、<sup>(14)</sup>高い英語の見識を持って統語構造や文脈内容まで校訂して植字までできる人物。その人物をCaxton工房で見出すとすれば、Caxton以外にはいない。<sup>(15)</sup>Caxtonは、*Le Morte Darthur*や*Game of Chess*のような宮廷貴族好みのジャンルの書物の場合、彼らの要求の高さを考慮に入れて殊の外作品の手直しに注意を払い、彼自ら植字することさえも厭わなかったと考えられる。

## 注

- (1) L.Hellinga, *Caxton in Focus: The Beginning of Printing in England*, London, 1982, pp.13-15 参照。
- (2) E.Vinaver, ed., *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols, Oxford, 1947, reprint with corrections 1948, 1967, reprint with corrections 1973, P.J.C.Field, rev., 1990 参照。
- (3) R.M.Lumiansky, ed., *Malory's Originality: A Critical Study of 'Le Morte Darthur'*, Baltimore, 1964; C.Moorman, *The Book of Kyng Arthur: The Unity of Malory's Morte Darthur*, Lexington, 1965 参照。
- (4) L.Hellinga, "The Malory Manuscript and Caxton", *Aspects of Malory*, Takamiya and Brewer, eds., Cambridge, 1981, pp.127-41 参照。
- (5) 高宮利行『アーサー王物語の魅力—ケルトから漱石へ』秀文インターナショナル, 1999, pp.106-46; 中尾祐治『トマス・マロリーのアーサー王伝説—テキストと言語をめぐって』風媒社, 2005, pp.12-20 参照。
- (6) 溝端清一「Caxton 版 *Le Morte Darthur* の 2 部の copy」『近畿大学語学教育部ジャーナル』第 6 号, 2010, pp.25-43 参照。
- (7) 調査するに当たり、Morgan copy は *Sir Thomas Malory's Le Morte D'Arthur, Printed by William Caxton, 1485*, reproduced in facsimile from the copy in the Pierpont Morgan Library, London, 1976 を用い、Rylands copy は筆者が John Rylands Library に依頼したマイクロフィルムを利用した。
- (8) J.W.Spisak and W.Matthews, eds., *Caxton's Malory: A New Edition of Sir Thomas Malory's Le Morte Darthur Based on the Pierpont Morgan Copy of William Caxton's Edition of 1485*, with a Dictionary of Names and Places by Bert Dillon, vol.II, Berkeley, 1983, p.614 参照。
- (9) Field, *op. cit.*, pp.cxxix-cxxx 参照。
- (10) 3つの作品の第1版と第2版を比較するに当たり、University Microfilms International 作成のマイクロフィルムを利用した。それぞれの作品の第1版と第2版の Short-Title Catalogue の番号は次の通りである。*Game of Chess* : STC (4920, 4921)、*Mirror of the World* : STC (24762, 24763)、*Reynard the Fox* : STC (20919, 20920)。
- (11) K.Mizobata, "Caxton's Revisions: the *Game of Chess*, the *Mirror of the World*, and

*Reynard the Fox”, Arthurian and Other Studies Presented to Shunichi Noguchi,*  
Suzuki and Mukai, eds., Cambridge, 1993, pp.257-62 参照。

- (12) N.F.Blake, *Caxton's Own Prose*, London, 1973, p.115 参照。
- (13) *Ibid.*, pp.85-88 参照。
- (14) *Game of Chess* の第2版では、第1版にはまったく無い挿絵が各章の始めに挿入されている。この点にも、第2版を売り込むため、顧客の好みに応えようとする Caxton の編集態度が窺える。
- (15) Caxton 工房には、Caxton が出版業をイギリスに移す時一緒に連れて来たロレーヌ出身の Wynkyn de Worde という植字工がいる。Caxton が亡くなった後、de Worde が Caxton 工房を引き継ぎ、700種類を超える印刷物を出版した。彼は、1498年と1529年に Caxton の *Le Morte Darthur* を再版する。これらに、Morgan copy の特定の sheet と *Game of Chess* の第2版の orthography 面での共通の特徴があるかを調査したが、共通する特徴は見られなかった。依って、Wynkyn de Worde の可能性は考えられない。